

と説明しているとすでに述べたが、もし全道57、900haのイモ畑で施肥量を半減できれば、約60億円の節減になり、しかもイモは完熟し、貯蔵中の軟化イモや圧扁イモなどのトラブルもなく、生食用では現状のでんぷん価が約2%は上昇できるだろう。

9. イモ数倍増で自然枯凋を

これまでの解説で分かるように、茎葉枯凋処理が必要なのは、多肥による急速な肥大、とくに夏季高温期に2Lになっている条件、というのはイモ数不足によるものとの理解にたどりつくだろう。具体的にいうと現在道内の平均株当イモ数7～8個を、2倍の15個にすべきで、そのためには株間をつめる方法もあるが、種イモ費がかさむので、小全粒(2S)種イモの浴光育芽により、現状の株当茎数2.5本を4.0本にするよう奨める。

この件に関してはすでにデータを示して論議してあるが、実際にはなかなか改善が進まず、異論(茎数が増加しても増収・規格内歩留まり向上ができない)があるので、図2のような現地データを紹介しておこう。

これは21戸の農家群(男爵薯・メークイン)の株当イモ数とイモ収量との関係で、収量とはS～2Lの規格内収量である。平均株当たりイモ数は9.9個とやや改善されており、単収も3.8tとやや良であるが、図内の回帰直線は「もし株当たりイモ数を15個にできれば、株当たり収量が1.3kgとなり、単収は5.8t(約倍増)に達するであろう」ということを示唆している。

この農家群は大部分が全粒種イモ利用者であるのだが、浴光育芽の方法がさまざまで不十分なのが多く、とくに光不足と不良種イモ除去が不十分である。

む す び

現行の茎葉枯凋処理は、そのまま生育をつづければ、肥大しすぎて売れない巨大粒が増えて減収になるという理由から中断するために行う。このように問題点を明確にし、それが多肥と少いイモ数に由来するものと把握し、生育診断の活用による適正施肥と、全粒種イモ(Sと2S)の浴光育芽による4～5茎株に整える技術を、早急に確立することで対応してほしい。

童謡 ジャがいもほり

子供たちに夢とよろこびを与える“いも掘り”は、昔から多く歌われてきました。深山 澄作詞、大中寅二作曲の「ジャがいもほり」もその一つで、昭和16年(1941)9月につくられています。日華事変から、まさに太平洋戦争へ突入する直前の戦時色の濃い時代で、各地で空地を耕し、いも、野菜などが植えられましたが、食糧不足の影が日に日に濃くなっていく時期、収穫のよろこびはまた格別で、大人ばかりでなく子

供たちも眼を輝かせて、土の中からころころと顔を出すおいもを、競い合って拾ったことでしょう。

エッサッサ エッサッサ

エッサッサと ほりだせジャがいも

はたけを かあさん

ほっぺが まっかだな

エッサッサ エッサッサ

エッサッサと ひきずるおおざる

やまもり にいさん

てのひら どろまみれ

(編集部)